



乳がん検査は、超音波検査の追加も必要!? 検診の「真実」

乳がん検査には、マンモグラフィ、超音波、MRIなど、いくつかの方法があります。それぞれの検査には長所・短所があるため、一律に自治体などの検診を受けていても早期発見できるとは限りません。ではどうすれば、効果的な受け方ができるのでしょうか？ 乳がん画像診断の第一人者、戸崎光宏先生にうかがいました。

万能ではないマンモグラフィ検査

行政や自治体の『対策型検診』で一般的なのがマンモグラフィ検査。X線検査のマンモグラフィは、微細な「がんの石灰化」を見つめるのが得意です。しかし、乳腺密度が濃い女性には適していません。乳房は主に脂肪と乳腺組織からできていて、乳腺組織が多くある状態を『高濃度乳腺（デンスブレスト）』といいます。高濃度乳腺の女性は乳房全体が白く映り（下の写真参照）、乳がんも同様に白く映るため、雪景色の中で白いウサギを探すようなもの。がんを見つけにくいのです。怖いのは、日本の集団検診の

多くが、がんが見えなければ「異常なし」と通知すること。ですから、検診を受けるなら、医師と対面で結果が聞ける医療機関を選ぶ、もしくは、結果が郵送された後、医療機関に乳房の状態を問い合わせることをおすすめします。

高濃度乳腺の女性は超音波検査も追加して

高濃度乳腺は一般的に若い女性が多いと思われがちですが、アジア人、特に日本人女性の50歳以上で約8割が高濃度乳腺だというデータもあるほどです。ですから、検診の際、自分が高濃度乳腺とわかったら、超音波検査を追加することをすすめます。

【超音波検査】



断ができる超音波検査は、しこりを見つけることが得意です。検診は自費（数千円）になりますが、マンモグラフィと併用することで、乳がんの検出率は1.5倍になります。

ただし、超音波検査は、医師や技師の経験や技術が必要です。信頼できる医療機関を選んでください（認定NPO法人乳房健康研究会のHPから医療機関を検索できます）。

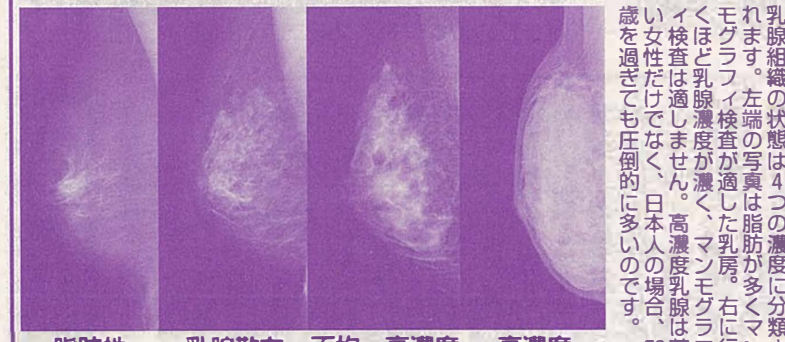
【マンモグラフィ検査】



がんの初期症状にみられる数ミクロンの石灰化も発見できる。ただし、乳腺もがんも白く映るため、乳腺密度が濃い場合は、がんが見つけにくい

特殊な音波を当て、その反射を捉える検査。乳腺密度が濃い場合に適した検査だが、微細ながんの石灰化は映らない場合がほとんど

『乳腺密度』の4つのタイプ



脂肪性 乳腺散在 不均一高濃度 高濃度

画像提供：NPO法人 乳がん画像診断ネットワーク

教えてくれたのは

戸崎光宏 医師
放射線科医師。相良病院附属プレストセンター・放射線科部長。さがらウィメンズヘルスケアグループ・乳癌科部長。東京慈恵会医科大学放射線科、亀田京橋クリニック画像センター長を経て現職。日本乳癌学会検診ガイドライン作成委員。NPO法人乳がん画像診断ネットワーク理事長。乳癌画像診断の世界的権威。

【MRI検査】



MRI検査は強い磁場を利用した装置で、乳がんを診断するための、もともと感度（病変の発見率）の高い画像診断です。しこりになる前の非浸潤がん（84%参照）の検出率は、マンモグラフィ検査56%に対し、乳房MRI検査92%というデータもあるほどです。しかし、MRIは検診段階で自費診療であること、また造影剤を投与しての検査であることから、一般の検診と比べ、敷居が高いのが現状です。欧米では遺伝的に乳がんにかかりやすい女性の検診に、MRIが有用だと知られています。もし、下記の表のチェック項目に1つでも該当していたら、遺伝性乳がんのリスクがあるかもしれないので、MRI検査を、「1度は受けてみる」ことを考えてみてください。受診する際は、日本乳癌検診学会の画像診断ガイドラインをクリアした医療機関を選んでください。

発見率は90%以上 MRI検査の威力

最近よく耳にする 遺伝性乳がんとは

基本的には、ハイリスクの女性に「マンモグラフィ+MRI」、ハイリスクではなく高濃度乳腺の女性は「マンモグラフィ+超音波」、それ以外の女性は「マンモグラフィのみ」というように、自分のリスクを知って、有効な検診を受けることが望ましいでしょう。

強い磁場を利用した検査で、造影剤を使用して行う。乳がん病変を発見する率は高いが、判定には専門性が高く、診断できる医師が少ないのが現状

女優のアンジェリーナ・ジョリーさんが、乳がんの予防のため、両乳房の切除手術を受けたことで注目された遺伝性乳がん。日本人でも、乳がん全体の5〜10%が、このタ

【MRIでしか見えない乳がん】



遺伝性乳がん簡単チェック表

- 40歳未満で乳がんを発症した方がいますか？
 - 年齢を問わず卵巣がん（卵管がん・腹膜がんを含む）の方がいますか？
 - ご家族の中で、お1人の方が時期を問わず、原発乳がんを2個以上発症したことがありますか？
 - 男性の方で乳がんを発症した方がいますか？
 - ご家族の中で本人を含め、乳がんを発症した方が3名以上いますか？
 - トリプルネガティブの乳がんと診断された方がいますか？
 - ご家族の中に、BRCAの遺伝子変異が確認された方がいますか？
- ※ 母方、父方それぞれの家系についてチェックを

タイプに該当するといわれています。遺伝性の乳がんの代表が、「遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）」です。少し難しい専門用語を使いますが、HBOCは「BRCA1」「BRCA2」という2つの遺伝子の病的な変異によって、生涯乳がんになる確率が最大で85%程度、卵巣がんになる確率が60%程度まで高くなる病気です。アンジェリーナ・ジョリーさんの場合「BRCA1」遺伝子の変異があり、生涯乳がんにかかる確率が80%以上と高く、予防が必要でした。しかし、もしこれが20%ならどうでしょう。予防的手術より、検診を欠かさないことを選択するかもしれません。このように、乳がんにかかりやすい遺伝子を持つていても、リスクは人それぞれ。自分が遺伝性乳がんに該当するかも、と不安になったら、まず遺伝カウンセリングを受ける手段もあります。実際に遺伝子検査を受けるかどうか、予防的治療に進むメリット・デメリットを含め、ベストの選択を一緒に考えてくれます。このような手段があることも、頭の片隅に残しておいてください。

